

# 発生から8年目をむかえる東日本大震災 ー被災地の復興・再生はまだまだ道半ばー

た か ぎ すすむ  
高木 晋

●日本郵政グループ労働組合（JP労組）・中央執行委員

2018年を表す漢字一文字は、「災」でした。

全国各地で、あってはならない地震・豪雨等の自然災害が発生し、尊い命がその犠牲になりました。また、被害に遭われた方の中には、今もなお避難生活を余儀なくされている方や、日常生活に支障を来している方、そして、復興が進みながらも風評被害に戸惑い、悩み続けている方も多くいます。

「震度3」、「震度4」、「かつて経験したことのない豪雨」等は、全国各地で発生し、自然界の猛威（恐怖）を身にしみて感じざるを得ない年でもありました。

被災からの復旧・復興・再生にどう向き合っていくか、「被災地に寄り添い」被災地のために何ができるか・・・我々は、この言葉の重みを受け止めなければならないと考えています。

復興・再生に向けて歩み出している被災地の思いは、やはり「被災したことを忘れないでほしい」、風化させてはならないことだと思います。

被災地で飲食店を営んでいる店主は、被災地に足を運んで頂いたお客さまに、「あの日、あの時にあったことを話す」、そして、お客さまと手紙のやり取りを通じて、再び被災地を訪れて頂く努力をしていると話していました。被災地に足を運んで、実際に自分の目で見て欲しい。これは、復興・再生が進められている現在も被災地の思いであります。

また、風評被害は、国内に留まらず海外にまで波及しているとうかがいました。被災地の商

品が供給できることは、復興に向けた大きな一歩であります。そして、商品には、被災から復興・再生にかける地域の皆さんの思いが込められています。安心・安全である商品が、風評被害により避けられ、被災地の思いが届かないことに憤りを感じ得ません。

一方、今後、想定される自然災害への備えをどうしていくか一人ひとり考えなければなりません。

予測される「南海トラフ地震」のシミュレーションや自治体のハザードマップが示されている中で、日頃から危機感をもって「自らの命を守る行動」と命をつなぐための食料等の備蓄を行わなければなりません。

私は、東日本大震災を経験したものとして、大震災を決して風化させてはならないと考えている一人です。一瞬にして尊い命を奪い、故郷の光景を変貌させた大津波を後世までその記憶を繋がないでほしいと考えています。そして、現在の復興・再生状況等確認いただくためにも被災地に足を運び、ご自身の五感で感じて頂きたいと思っています。

被災地の復興・再生は進んできているものの、まだまだ道半ばです。

まもなく8年目をむかえる東日本大震災について、発生当時の状況や現在の復興・再生状況について、報道されることも多い時間帯となりました。大震災を風化させず被災地に思いをよせ、そして、教訓を活かす危機管理体制を一人ひとりが考えて見るべきだと思います。